アンドリューの歴史エッセイ

vol.5

北陸源平合戦物語

今回の物語は平清盛に次ぐ実力者だった平時忠の栄枯盛衰と、その子孫たちの物語です。

平時忠とその一族の墓
住 石川県珠洲市大谷町則貞

奥能登珠洲に流された平氏のナンバー2 平時忠とその子孫たち

「平家にあらずんば人にあらず」と豪語した平氏のナンバー2

「平家にあらずんば人にあらず」絶頂期の平氏の様子を伝えるためによく引用される言葉ですが、まさにこの言葉を発した人物こそが今回の主人公である平時忠です。

平時忠は平清盛の正室だった平時子の弟にあたります。

同じ平氏でも武家平氏だった清盛に対し、時忠は公家平氏の一族の出身。公家平氏は当時、官位は武家平氏より高くても、まったく宮廷社会では力がありませんでした。

しかし、時忠の姉の時子が清盛に嫁いだことで、時忠も清盛と共に出世の階段を駆け上がっていきます。また、時忠の妹の平滋子は、清盛の画策で後白河天皇へ嫁ぎ高倉天皇を生みます。妹が天皇の母となったのです。ここにきて時忠は、清盛に続く平氏のナンバー2となり、絶大な権勢を誇ることになったのでした。

平時忠が上陸したと伝わる地「郷の澗（ごうのま）」
住 石川県珠洲市大谷町則貞

平清盛と後白河法皇の対立と源平合戦での敗北

しかし、この栄華は長くは続きませんでした。清盛と後白河法皇の間をとりもっていた滋子の死をきっかけに、清盛と後白河法皇の対立が深まっていったのです。そして以仁王（もちひとおう）の挙兵に始まる源平合戦が始まりますが、そんな矢先に清盛が急死してしまいます。最終的に平氏は壇ノ浦で源義経に敗北。時忠の姉の時子も絶望し、安徳天皇を抱いて海の下に身を投げました。

でも時忠は簡単に死ぬことを潔しとしませんでした。降伏し生け捕りにされてでも、何が何でも生き延びようとしたのです。源義経と姻戚関係を結んだり、三種の神器のひとつである神鏡を守ったことを主張するなど徹底的に生き残りを図りました。

結果、武家平氏ではなく公家平氏の出身だったことも手伝って、時忠は死罪は免れ奥能登への流罪と決まったのです。

奥能登珠洲・輪島に残る時忠の墓所と時忠の子孫たち

時忠が流罪の際に上陸したとされる場所が珠洲市にあります。そこは「郷の澗（ごうのま）」と呼ばれ、烏川（からすがわ）の河口付近だったと伝わります。一羽のカラスに案内された時忠は、行き着いたところに館を建て、そこでその生涯を閉じました。

その館跡のある則貞には、時忠と一族の墓と伝えられる石塔群が今も子孫である則貞家の手によって守られています。

また珠洲市の隣、輪島市にも時忠の子孫がいます。時国家です。平時忠の子にあたる平時国の代以降、苗字を平から時国に変え、今に至るといいます。

時国家は江戸時代、江戸幕府の直轄地である天領と加賀藩の領地の2家に分かれ、それぞれ天領の大庄屋と加賀藩の十村役に任命されました。

江戸時代の時国家は農業経営を行っていただけでなく、金融業や鉛や銅の鉱山・塩田の経営、はては大きな船を所持して北海道の松前まで行くなど海運業にも進出。多角的な経営をしており、農民という枠を大きく超えた存在だったことが注目されています。

流罪となってもたくましく生き続け、今も奥能登の観光地として華やかな存在であり続ける姿は、まさに平氏の末裔らしいといえるような気がするのです。

←重要文化財 時國家（下時国家）。加賀藩領で十村や山廻役などの重職を担った。
住 石川県輪島市町野町西時国2-1
営 開館期間：4～11月の土・日曜と5月3～5日
開館時間：10:00～16:00

→安徳天皇社。時国家の邸内には、壇ノ浦で時忠の姉である平時子とともに入水した安徳天皇を祭る神社があります。

←時国家（本家 上時国家）。天領の大庄屋を務め、大納言の格式を示す「大納言の間」がある。
住 石川県輪島市町野町南時国
休 なし
営 8:30～17:00
（7～9月は～17:30）

時国家も行った
揚げ浜式製塩が学べる

道の駅すず塩田村 塩の資料館

古来からの「揚げ浜式製塩」での塩づくりの見学や製塩体験ができる塩の資料館と塩の生産販売を行っている施設。日本海の絶景を眺めながらの休憩や、昔ながらのミネラル豊富な塩が購入できる施設です。

住 石川県珠洲市清水町1-58-11

後書き

平時忠は「平家にあらずんば人にあらず」の言葉だけが一人歩きをしているように思います。実際に時忠について調べてみると、生き延びることへの執着など非常に人間味溢れる人だったんだなと改めて感じました。平時忠はもっと世間に知られても良いのでは。そう思います。

安藤竜（アンドリュー）
金沢歴活代表
1974年兵庫県生。金沢市在住
関西学院大学大学院文学研究科日本史学専修卒業
専門は日本近世史
金沢で歴史イベントや講座を定期開催中